

PHAYAO レポート 2025-03 (山口県立大学 PBL フィールド)

タイモン族の村における持続可能な農業と環境調査

「いっしょに」とは何か

山口県立大学 国際文化学科 3年 金田菜々子

はじめに

8月20日から1週間、シャンティ山口によるタイ・チェンライでの環境調査研修に参加しました。本レポートでは、2泊3日のモン族の村でのホームステイとシャンティ寮での生活を中心に、私が考える国際協力について述べます。

きっかけ

私は国際協力団体で働くというビジョンを持っています。大学では、日本語教育を国際協力の現場で活かすことを目標として専攻しています。「教育」と聞くと先生と学習者という関係性に堅いイメージがありますが、私にとって日本語教育は「日本語を通した友だちづくり」です。しかし、この考え方は一步間違えると一方通行になり、学習者が私を「友だち」と捉えてくれるかどうかは私の行動次第です。国際協力でも同様で、私が「協力したい」と思うのは一方的なエゴになりかねず、双方向的な関係を築かなければ植民地主義と変わらないと考えています。

大学では TFT (Table For Two) での国際協力活動や日本語ボランティアに取り組み、知識だけでなく経験を大切にしてきました。進路について考える機会が増えるなか、日本以外での経験が少ないと気がつきました。そこで TFT の活動でお世話になっている進藤先生を通して本プログラムを知り、本来は2年生が履修する授業でしたが、直談判して参加させていただきました。

私の目標と活動内容

私にとっての「友だち」関係とは「いっしょに」がポリシーです。ホームステイでもシャンティ寮でも、お客さまではなく、「いっしょに」している人になることを意識しました。

ホームステイ

タイのチェンライに到着し、車で、舗装されていない道を2時間ほど進むと、少数民族モン族が暮らすホイプム村に到着します。雲が近く感じられるほど高い標高の村で、私は2泊のホームステイを体験しました。

ホストファミリーは9歳の女の子、5歳の男の子、2歳の女の子、お母さん、お父さんの5人家族です。私の家族構成と同じだったので親近感が湧きました。スクールから帰ってきた9歳のギヤに村を案内してもらうと学校帰りの道草ついでに一緒に歩きました。

散策中、色鮮やかな花やグアバの木に紛れて、お菓子のゴミが散乱しているのが気になりました。村には企業広告や道路標識がほとんどないため、カラフルなパッケージゴミはとても目立ちました。

「ゴミ、ひろう」と声をかけながら拾い始めると、10人ほどの子どもたちが宝探しのようにいっしょに集めてくれました。(写真1) 2時間ほどで全員の両手が埋まるほどになり、スクールの

ゴミ箱に捨てようとすると、子どもたちは川の斜面に捨てました。驚きましたが、斜面には衣類やビニール袋など様々なゴミが積み重なっており、長らく村の「ゴミステーション」として機能していたことが読み取れます。(写真2)

しかし、なぜゴミ箱はスクールにしかないのでしょうか？

スクールのゴミ箱はタイ政府による設置であり、村には設置されていません。さらに、村の人にとってお菓子の袋はグアバの種や野菜のヘタと同じ「いつか自然に還るもの」という認識のため、ゴミ箱を設置しても利用されにくい現状があるのです。

実際、家の中にもゴミ箱はなく使わなくなつたものは家の外に放置されていました。



写真1 ゴミを拾う様子



写真2 川の斜面のゴミ

2日目は丸一日ホストファミリーと過ごしました。朝方の豪雨の影響でお父さんは農地に行かず家で過ごすことでした。

朝、ギィヤとスクールへ行き、始業まで英語の絵本を読みました。スクールではモン語ではなくタイ語で教育が行われており、子どもたちは簡単な英語も使いながら学校の道具の名前を教えてくれました。私がうまく発音できないと「イープン (ญี่ปุ่น=日本人) だからね」と笑ってくれ、距離が一気に縮まりました。

家に戻ると、ホストファミリーの家には多くの人が集まり、国からの書類をいっしょに記入していました。お父さんもお母さんも読み書きができるため頼られているようです。邪魔にならないようにしていると、隣のおばあちゃんが私のボトルホルダーを褒めてくれました。飛行機の中で偶然暇つぶしのために編んでいたものでした。まだ毛糸が残っていたので、毛糸がある限り作ることにしました。

水分補給をするのにボトルホルダーは便利だと、そんな意味で、ジェスチャーしてくれました。

このように頼られているという感覚はそのコミュニティーの一員になったように思えます。

この日の夜は村のお祭りがありました。家に子どもたちが15人ほど集まってみんなで伝統衣装に着替えます。私もお母さんたちに着替えを手伝ってもらいます。

お祭りは日本と似ていて餅つきしたり、踊ったりしました。伝統衣装は金属でできたスパンコールのようなもので装飾され、しなやかな伝統舞踊の音楽にもなっているようでした。



写真3 お祭りの様子



写真4 モン族の伝統衣装

私たちはラジオ体操を披露して盛り上りました。朝にも村の大人たちとラジオ体操をしたのですが、シンプルな動きのため大変ウケが良かったです。

この日の夜は遅くまでみんなで楽しんだのですが、翌朝も6時から一日が始まります。お父さんは朝食のおかず、お母さんはかまどの火加減と洗濯。私の役割は皿洗いでした。お皿は使う前に洗う習慣があるため、朝食前に6人分洗います。

子どもたちはお菓子ばかり食べるため、食事はありません。また、歯磨き習慣が浸透しておらず、虫歯の子が多いことも気になりました。

3日間は「非常に短い」だけでなく、まだこの村でやれることがあると強く感じさせるものでした。ゴミの問題も、子どもたちの健康も、私にとって3日はあまりに短かったです。まだまだ「いっしょに」したいことがたくさんあります。



写真5 食卓の様子



写真6 お別れの様子

シャンティ寮

シャンティ寮では4日間お世話になりました。中学生から高校生までが共同生活をしており、朝3時にマーケットで買い出しをし、炊事・洗濯・農作業も自分たちでこなしています。大学生の私が見ても驚くほど自立した生活でした。

私には宿泊部屋が用意されていましたが、できる限り食堂でみんなと過ごすようにしました。YouTubeを見て盛り上がる子、絵を描く子、進路のために中国語を勉強する高校生もいます。私は大学で中国語を学んでいるので、いっしょにスマホアプリで勉強しました。日本語教育での知識を中国語学習のサポートに応用できたことは自分でも予想外でした。

食事当番では、炒め物や配膳をいっしょにしました。中国語を勉強している子も多く、私が中国語ができると知ると盛り上りました。

食後はダンス練習です。文化交流会に向けてタイのポップスを練習しますが、私はダンスが苦手で本当は踊りたくありませんでした。しかしここで逃げると「いっしょに」という目標は達成できません。迷っていると、男の子がGoogle翻訳で「ななこさんも、いっしょに！」と声をかけてくれました。私のポリシーを相手から言ってもらえるとは思いませんでした。

言語が十分に通じないからこそ、踊りや表情などの非言語的コミュニケーションが大きな意味を持ちます。彼らへの感謝は、私がいっしょに楽しむ姿を見せることだと実感しました



写真7 配膳の様子

パヤオ大学

シャンティ寮滞在中にパヤオ大学リベラルアーツ学部日本語学科を訪問しました。海外の日本語教育現場を見るのは初めてで、大きな学びとなりました。

山口県立大学の学生4人がそれぞれ日本文化を紹介し、私は「相撲」をテーマに、歴史と社会問題を話しました。事前に日本語レベルを共有していただいていたため、それに合わせて構成しました。

学生のみなさんに感想を聞くと、言語的理解はできたものの、文化的・内容的には少し難しかったようです。それでも、同年代の日本人と交流できる機会は貴重だと言ってもらえ、温かい時間を過ごせました。

国内の日本語学習は、日常生活が教材であり、スーパーでの買い物や周囲の会話から自然に学ぶことができます。しかし国外ではその機会が圧倒的に少なく、意図的な学習環境が必要です。学習者のモチベーションの維持には、ネイティブスピーカーの関わり方が非常に重要であることを痛感しました。



写真 10 パヤオ大学での発表の様子

おわりに

私の目標「いっしょに」は、この1週間でどこまで達成されたのでしょうか。帰りの飛行機では非常に満足していました。村では名前をたくさん呼んでもらい、シャンティ寮では男の子のおかげでダンスを楽しむことができ、パヤオ大学では「いっしょに」の意味を日本語教育の観点から考える時間となりました。確かに、みんなと「友だち」になれたと思います。

このレポートを書いているのは、帰国から3か月がたった11月です。実は帰国約5日後、私は台湾へ渡り、半年間の日本語教育実習をしています。ここでは「先生」という立場が強まり、「日本語を通した友だちづくり」という理想から離れてしまう瞬間があります。しかし、タイでの1週間を文章にしてみると、「いっしょに」の目標への執念がいま試されているのだと感じます。

「いっしょに」をポリシーとして「友だち」をと考えていましたが、今ではこの1週間で出会ったみなさん、そして、経験が私の先生になっています。

最後になりましたが、佐伯さんをはじめ、シャンティ山口のガランさん、ジッポンさん、ホイプム村・シャンティ寮・パヤオ大学のみなさま、そして引率してくださった進藤先生に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

—以上—



サンティスク村寮生と

海外渡航プログラムを通じて発見した 課題と価値観の再考

山口県立大学国際文化学部国際文化学科 3 年

中山 英

2025 年 8 月 19 日から 26 日にかけて実施されたスタディツアーパーに参加し、現地での体験を通して認識した社会課題と、そこから得た自己の学びについて述べる。

プログラム前半では、山岳部に暮らすモン族の村で 2 泊のホームステイを行った。事前学習では、日本の戦後間もない時期と同程度の生活水準であることを学び、水回りや電力事情に不便があることは想定していた。しかし実際に生活してみると、単なる「不便さ」ではなく、それが日常として成立している社会のあり方を実感した。トイレや入浴は、バケツで水を汲んで使用する方式であり、トイレットペーパーを流せないなど、日本の衛生基準とは大きく異なっていた。一方で、山岳部の水資源は比較的豊富で、飲み水は沸かさないと飲めないものの、水の使用が極端に制限されているわけではなかった。このことから、「設備が整っていない=生活の質が低い」と単純に結論づけるのではなく、自然環境や地域条件に適応した生活様式が形成されていることを理解する必要があると感じた。一方で、生活の中で強く問題意識を持ったのが衛生および口腔環境に関する課題である。村では手洗いやうがいの習慣が十分に定着しているとは言い難く、石鹼の使用や消毒の習慣もほとんど見られなかつた。加えて、甘味の強いお菓子や飲料が日常的に摂取されているにもかかわらず、歯磨きの習慣が限定的であることから、虫歯や健康被害が生じやすい環境であると考えられた。プロジェクトを通じて、シャンティ山口が現地医療機関と連携し、歯磨き指導などの保健活動を行っていることを知ったが、その効果は必ずしも十分とは言えないよう感じた。その背景には、近代化に伴う食生活の変化が、保健教育の浸透速度を上回っているという構造的問題があると考えられる。この状況は、日本が過去に経験した「砂糖普及による虫歯増加」と類似しており、衛生知識の普及だけでなく、医療アクセスの整備や継続的支援の必要性を示している。

この経験を通して私が学んだのは、社会課題は単独では存在せず、生活様式、経済状況、価値観、近代化といった複数の要因が絡み合って生じているということである。外部から見て「改善すべき問題」に思える事象も、当事者の生活様式の中では必ずしも優先度が高いとは限らない。そのため、支援や介入を行う際には、外部の価値観を一方的に押し付けるのではなく、地域の現状や歴史を踏まえた関わり方が求められると感じた。

後半に滞在したモン族の子どもたちが中学・高校に通うための寮では、電気や水道などのインフラが整備されており、当番制による炊事や農作業など、自立的な生活が営まれていた。寮生たちが主体的に役割を果たし、協力しながら生活する姿を見て、お世話されることに慣れがちな日本の子どもたちにあっても、同様の仕組みは有効ではないかと考えさせられた。すべてを自分でこなさなければならない状況が常に望ましいとは言い切れないものの、独立心を高めるうえでは有効であると考える。この経験を通して、日本の生活様式が必ずしも「最適解」であるとは限らないことに気づかされた。

今回のスタディツアーパーを通して、私は「支援する側」「観察する側」として現地を見るのではなく、自分自身の常識や価値観を問い合わせ直す立場に立つことの重要性を学んだ。社会課題を理解するとは、問題

点を指摘することではなく、その背景にある構造や人々の生活を理解しようとする姿勢を持つことだと実感した。この学びは、今後自分が社会と関わっていく上での基盤になるとを考えている。本プログラムに参加したことで、学生のうちに、言語や文化、生活環境が大きく異なる地域での生活を実体験し、自身の価値観や常識を相対化することができた。社会人になると時間的・制度的制約が大きくなる一方、大学の授業を通じた渡航であれば一定の安全が確保されており、挑戦しやすかつた。

本プログラムの実施にあたり、渡航から現地での学習に至るまで多大なご支援をいただいた佐伯さま及びスタッフの皆様に、厚く御礼申し上げます。

—以上—



ホイプム村のホストファミリーの皆さんと



ホイプム村でお祭り参加



サンティスク村「緑の募金プロジェクト」看板と

近代化する村

山口県立大学国際文化学科 2年 吉尾里美

モン族が暮らす地域は山奥で不便だという先入観を持っていたが、プロジェクト演習を通してその認識が大きく変わった。近年、電気やWi-Fiが整備され、村人は日常的にインターネットを利用していた。子どもたちはモン語だけでなくタイ語も使い、学校教育も受けていた。近代化が進む一方、自然の中で確立した地域コミュニティにおいて、伝統と革新が共存していることを現地で学んだ。

農業中心の生活や教育環境、モン族特有の刺繡や言語の継承など多くの課題がある中で、特に子どもの生活習慣に強い関心を持った。甘いお菓子やジュースを日常的に摂取し、夜遅くまで暗い中でスマートフォンを使用する姿は、日本の子どもたちと変わらず、山間部でも同様の状況が広がっていることに驚いた。健康への影響や依存の危険性について、保護者や子どもがどこまで理解しているのか疑問に感じた。

モン族の村での生活を通して、日本社会においても近所付き合いや地域のつながりは、取り除かれるべきではないと強く感じた。村では日常的に人々が声を掛け合い、子どもも大人も地域全体で見守られている。このような関係性は、個人の孤立や不安を防ぐ重要な役割を果たしている。核家族化や共働き世帯の増加により、子どもの預け先や高齢者介護などの問題が生じている日本社会では、家族のみで支え合うことに限界があると感じる。少子高齢化や過疎化が進行する中で、行政サービスだけに頼るのではなく、地域住民同士が日常的に関わり、助け合う仕組みがより求められている。モン族の村のように、地域コミュニティの中で通して助け合うことは、日本社会が直面する過疎化のような地域課題の解決においても大きな役割を果たすと考えた。

プロジェクト演習に参加したこと、先進国では問題視されている事柄でも、地域や文化が異なれば必ずしも同じように受け取られるとは限らないことに気づいた。自分の価値観が正しいと思い込んでしまうのは人間として自然なことだが、その考えを一方的に押し付けてしまえば、相手の文化や生活を損なう可能性がある。今後は大学生活や将来の進路においても、多様な視点を意識し、相手の立場を尊重した判断や行動を心掛けていきたい。

—以上—



シャンティ寮で田植え完了

ホイプム村で学んだ豊かさの本当の意味

山口県立大学国際文化学科 2年 佐々木弥音

ホイプム村では、かつて遺伝子組み換えによるトウモロコシ栽培が行われていたが、環境への悪影響が大きいという問題を抱えていた。そのため現在では果物栽培へと転換が進められており、NPO 法人シャンティ山口の支援のもとで持続可能な農業への取り組みが行われている。私たちは持続可能な農業と環境調査を目的に、2泊3日のホームステイを行った。

初めてタイのホイプム村に到着したとき、そこは事前に想像していた場所とは大きく異なっていた。事前学習では電気はなく、お湯も出ないと聞いていたため、不便な環境を覚悟して現地を訪れた。しかし実際には、ソーラーパネルによって電気が供給されており、スマートフォンを使用することもできた。一方で、お湯は出ず、天候が悪い日には電気の使用量が制限されるなど、生活様式は決して便利とは言えない。それでも実際に暮らしてみると、大きな不便さは感じることなく、村は少しづつではあるが着実に豊かになっていると感じた。

本来予定していた持続可能な農業に関する調査は、悪天候の影響で実際に体験することができなかつたため、主に生活環境調査を行った。現地の方と過ごす中で、生活が豊かになることの弊害に気づくことができた。その中でも特に印象に残ったのが、子どもたちの虫歯が多いことだ。環境調査の一環でホイプム村の幼稚園および小学校を訪れた際、幼稚園では園児に甘いジュースが配られ、小学校ではジュースに加えてお菓子も配されていた。子どもたちは日常的にお菓子を口にしており、夜9時ごろにホストファミリーの家で過ごしていると、近所の子どもたちがお菓子を食べながら家に入ってくる様子もみられた。また、タイのジュースは日本のものと比べて非常に甘く感じられたが、そのようなジュースをまだ小さな子どもが日常的に飲んでいる状況であった。ホームステイ先の家庭には2人の子どもがいたのだが、歯ブラシは大人用のものしかなく、子どもたちが歯磨きをしている姿を見ることはなかった。ホイプム村の子どもたちに見られた虫歯の問題は、生活の利便性や食品の多様化が進む一方で、健康に対する意識や知識が十分に浸透していないことが原因であると考えられる。この状況は、日本において戦後から高度経済成長期にかけて甘いお菓子や飲み物が普及し、虫歯が増えた時代と共通している。つまり、経済的な豊かさは必ずしも健康や生活の質の向上に直結するものでなはないということを示している。この経験を通して、豊かさとは単に経済的に発展することではなく、人々の健康や生活習慣まで含めて考える必要があると改めて認識した。地域社会が持続的に発展していくためには、経済的な成長と同時に、人々の健康や生活習慣を支える仕組みを整えていく必要があると感じた。

また、このプロジェクトを通して、表面的な情報に流されずに物事を観察することの大切さを学んだ。ホイプム村を実際に訪れてなければ、電気が普及していることを知ることもできなかつただろうし、単に豊かになったと安易に捉えてしまい、健康への意識が追い付いていないという課題に気づくこともできなかつたと思われる。この学びを今後の大学生活に活かし、授業や調査、グループワークにおいて、与えられた資料や一つの視点だけで判断するのではなく、実際の事例や背景に目を向け、多角的な視点から物事を捉え、課題を発見していきたい。

—以上—